

2023年冬鳥ウォッチ

バードリサーチ 山崎優佑・平野敏明

2023年度の冬(以下、23年冬)は、気象庁によると全国的に気温が高く、北・東・西日本の日本海側の降雪量は少なかったようです[1]。ただ、関東地方では、確かに冬の初めは暖冬のように感じられましたが、2月は気温が低かったように思います。海外の方へ目を向けると、中国の冬は地域によって差はあるものの全体的には平年並みの寒さだったと報じられています[2]。気候以外にも2023年度は、環境省[3]によると、4月～12月までのツキノワグマの出没件数が2009年度以降最多となりました。東北地方でのクマの出没件数の多さにはブナ科堅果類の凶作が関係しているかもしれないようです。アトリもブナの実を餌にしていますが、こうした気候や餌資源は鳥類の越冬状況に影響を及ぼしたかもしれません。以下に23年冬の記録状況を報告します。

調査地及び記録状況

23年冬は、北海道から九州までの58名に114か所の調査地で各種の合計182件の情報が寄せられました(図1)。それらの情報の中には、「冬鳥ウォッチで対象としている種が観察されなかった。」という情報もあります。また、対象種が観察されなかった場合、備考欄に「対象種が飛来する年もあった。」と記入していただいた情報もあります。このような情報も分析を行う上で重要となりますので、ぜひ今後も寄せていただきたいと思います。

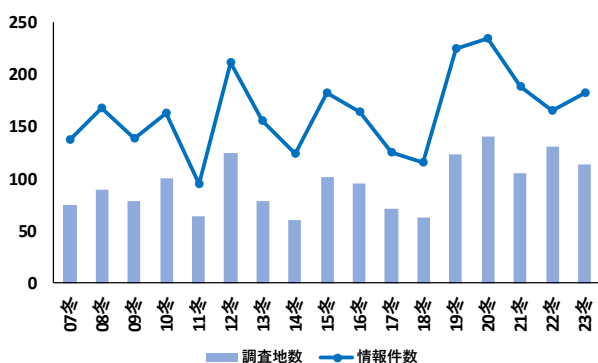


図1. 冬鳥ウォッチの調査地数および情報件数の推移。

23年冬の情報件数を地域別で見ると、関東地方からの情報が最も多く、その次は中部地方からの情報でした(図2)。四国地方からの情報は冬鳥ウ

ォッチではありませんでしたが、あわせて解析にもちいた「野鳥データベース」には四国の越冬状況に関する情報が寄せられています。

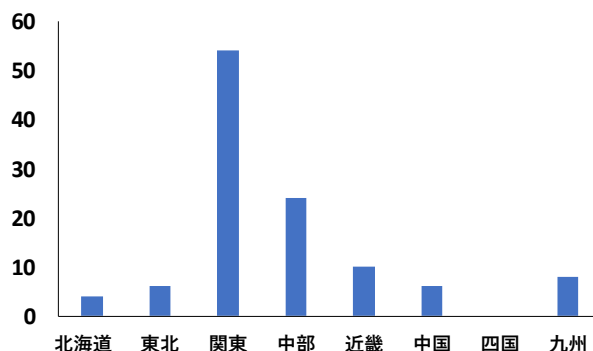


図2. 地域ごとの調査地件数。

23年冬の冬鳥の傾向

23年冬の対象種の越冬状況を解析するにあたっては、これまでと同様、冬鳥ウォッチの情報だけでなく、野鳥データベース「フィールドノート」に寄せられた12～2月の情報も含めて分析しました。

23年冬で最も驚いたことは、イスカの情報件数が非常に多かった事です。23年冬のイスカの情報件数は51件で、10年冬以降では突出して最も多い年でした(図3)。これまで大陸で越冬していた個体群が23年冬は日本に飛来したのかもしれませんが、これがこの1年限りのことなのか、それとも

今後もこのようことが頻繁に起きるようになるのか来年度以降も情報収集を続けていきたいと考えております。

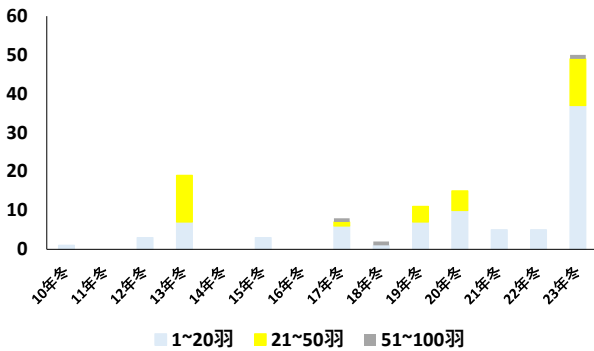


図3. 10年冬～23年冬のイスカの情報件数。

マヒワの情報件数は近年減少傾向でしたので、繁殖環境が悪化して繁殖成功率が低下しているのかもしれないと懸念していましたが、23年冬は21年冬や22年冬よりも多くの情報が寄せられました(図4)。マヒワの越冬個体数が年によって変動することは以前から知られていましたが、規則性がないのか、これまでに寄せられた情報から15年冬から23年冬のマヒワの情報件数を図4にまとめました。これを見ると、この9年間で情報件数の増減が繰り返されているように見えます。例えば16年冬は15年冬より情報件数が多かったですが、17年冬と18年冬は減少しています。その後19年冬は情報件数が増えています。これらのことからマヒワでは繁殖成績、あるいは渡りのルートが周期的に変化するのかもしれませんが、これについても今後注視していきたいと考えております。なお、18年冬以前と19年冬以降では情報件数が大きく異なっていますが、これは19年冬から正月にインターネット・バードソンを開催するようになったことが関係していると考えられます。

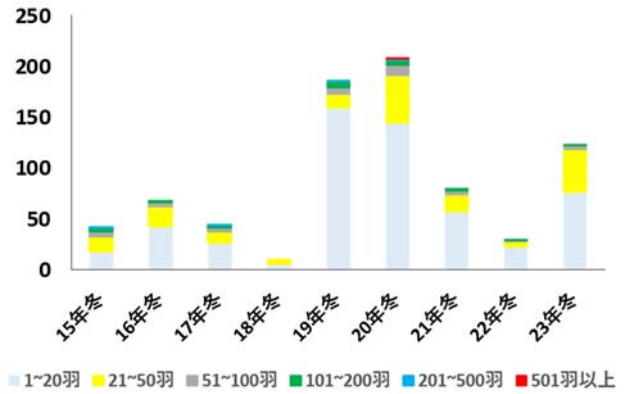


図4. 15年冬～23年冬に寄せられたマヒワの情報件数。

23年冬のアトリは情報件数だけなら22年冬よりも多いですが、200羽を超える群れの情報はありませんでした(図5)。それに対して22年冬は東北地方や九州地方で数千羽の群れが記録されました(図5)。この事から越冬個体数は22年冬より少なかったことが示唆されます。23年冬は中国など暖冬だった地域で越冬する個体が多く、日本には飛来しなかった個体群がいたのかもしれませんが。あるいは東北地方では、23年冬はブナの結実状況は大凶作のため[4]。集団で採食できず、分散して採餌をしていたのかもしれませんが。

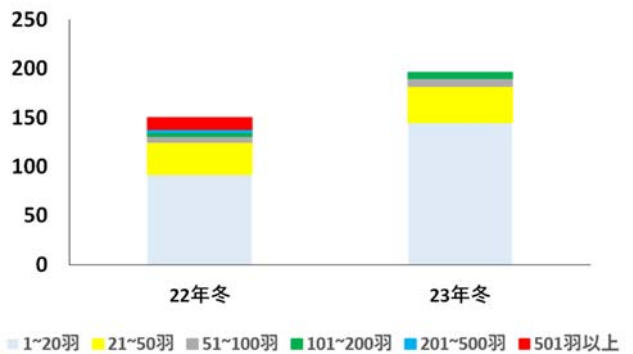


図5. 22年冬と23年冬に寄せられたアトリの情報件数。

カシラダカの個体数は今も減少しているのか？

カシラダカは、2016年にIUCN（国際自然保護連合）のレッドリストの改定で、絶滅危惧 VU（絶滅の危険が増大している種）に選定されましたが、その後、個体数はどうなっているのでしょうか。冬鳥ウォッチや野鳥データベースに寄せられているデータで、継続的に野鳥の個体数の調査がされている地点が、2019年以降増えてきています。調べてみたところ、この5年間のうちカシラダカが1回でも目撃されている地点で、3年以上個体数の調査も行われている地点は221か所ありました（図6）。そこで今回、これらの情報を使ってカシラダカの個体数の推移をTRIM（Trends and Indices for Monitoring data）で分析しました。その結果、個体数は有意に減少していると判定されました（図7）。このことから今もなお個体数は減少し続けている可能性があります。カシラダカは主に地上で草の種子などを食べる鳥です。そのため近年には採食環境が悪化したことで生息状況が悪化しているのかもしれませんが、実際に冬鳥ウォッチにご協力いただいている方々によると、毎年数十羽～数百羽規模のカシラダカの群れが越冬していた場所の中には、草が縮小してしまっており、越冬個体数も減少している場所もあるようです。いずれにせよ引き続き個体数の推移について注視していきたいと考えております。

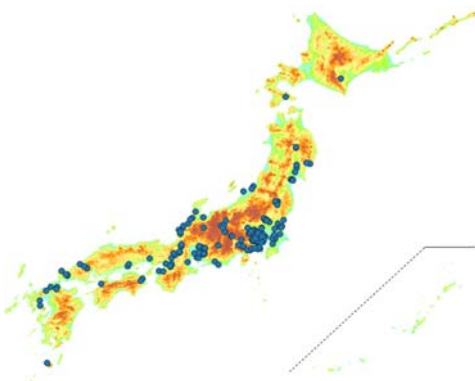


図6. 冬鳥ウォッチや野鳥データベースに寄せられた19年冬～23年冬で3年以上調査された地点。

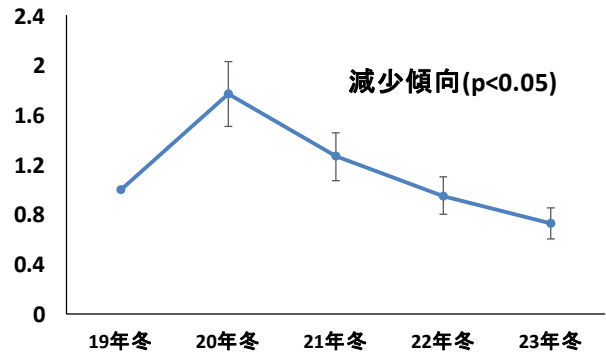


図7. 19年冬～23年冬のカシラダカの個体数の推移。X軸は各年、Y軸は、TRIMの分析によって得られた各年の個体数を指数。19年冬の個体数を基準値1としている。

今回のカシラダカの個体数の解析のように、複数の調査地点のデータを使って解析できたのは、皆様のご協力があったからです。引き続きご協力いただきますようよろしくお願いいたします。

末尾ながら、冬鳥ウォッチの送信フォームより情報をお寄せ頂きました皆さまのご芳名を記してお礼に替えさせていただきます。恐れ入りますが、姓と名が分からなかった方については記す事ができませんでしたので、予めご了承ください。また、今回分析を進めるにあたって野鳥データベースや食性データベースに収集されたデータも利用させていただきました。日頃より野鳥データベースに情報を提供して頂いている皆様にも深く感謝申し上げます。

まるおめいじ、安藤宣朗、井上幹男、井上賢三郎、越川重治、塩原文緒、岡野勇志、加藤俊哉、加藤美奈子、河辺典子、皆川昌人、関口佳子、久保賢一、隈田和男、五十嵐勉、後藤裕子、高橋邦年、高野信久、佐伯彰光、笹野義一、三藤文彦、鹿間信弘、小川結衣、小池順子、小林尹夫、松下よし子、松山陽子、植田睦之、新井康弘、森佳子、菅原美奈子、清水朱璃、西川光一、西村四郎、西野浩文、千島康幸、川上由希、前田容子、村田一刀、村尾雅宏、大江芳雄、滝澤三郎、池永祐二、中村さやか、中村文夫、中村麻衣、中津弘、長嶋宏之、渡辺明

美, 島崎康広, 藤波不二雄, 内田慧, 平野あかね,
蓑宮雅弘, 野呂篤, 齊木孝

引用

- [1]国土交通省 気象庁 2023 年～2024 年の冬
(12 月～2 月) の天候(最終閲覧日：2024 年
5 月 5 日).
<https://www.data.jma.go.jp/cpd/longfcst/seasonal/202402/202402s.html>
- [2] 人民網日本語版 (2024 年 3 月 4 日) 中国
の今シーズンの冬は「平年並み」の寒さ(最
終閲覧日：2024 年 5 月 5 日)
[http://j.people.com.cn/n3/2024/0304/c944
75-20140298.html](http://j.people.com.cn/n3/2024/0304/c94475-20140298.html)
- [3] 環境省クマ類の生息状況, 被害状況等につ
いて(最終閲覧日：2024 年 5 月 5 日)
[https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/
effort12/kuma-situation.pdf](https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort12/kuma-situation.pdf)
- [4] 東北森林管理局 ブナ開花・結実調査(最終
閲覧日：2024 年 5 月 5 日)
[https://www.rinya.maff.go.jp/tohoku/sidou
/buna.html](https://www.rinya.maff.go.jp/tohoku/sidou/buna.html)